死ぬのであったらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召したが、今日から始めるはずの祈祷も高僧たちが承っていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませぬというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお帰しになった。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになってお眠りになることが困難であった。帰った更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ帰って来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去になりました」

と言って、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ帰って来た。

更衣の死をお聞きになった帝のお悲しみは非常で、そのまま引きこもっておいでになった。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢れのやかましい宮中においでになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになった。皇子はどんな大事があったともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけを不思議にお思いになるふうであった。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものはなかった。

どんなに惜しい人でも遺骸は遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになって、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣きこがれていた。

トイパル｜無料本・書籍・ダウンロード・取り放題｜トイレに貼りたい！トイレで読む本

そして葬送の女房の車にしいて望んでいっしょに乗って愛宕の野に
いかめしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに
悲しかったであろう。
「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない
私の迷いをさますために行く必要があります」
と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまいそうに泣くので、
こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。
宮中からお使いが葬場へ来た。更衣に三位を贈られたのである。
勅使がその宣命を読んだ時ほど未亡人にとって悲しいことは
なかった。三位は女御に相当する位階である。生きていた日に女御
とも言わせなかったことが帝には残り多く思召されて贈位を
賜わったのである。こんなことででも後宮のある人々は反感を持った。
同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことの
できなかった人であると、今になって桐壺の更衣の真価を
思い出していた。あまりにひどい御殊寵ぶりであったからその当時は
嫉妬を感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。
優しい同情深い女性であったのを、帝付きの女官たちは皆
恋しがっていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合の
ことであろうと見えた。時は人の悲しみにかかわりもなく
過ぎて七日七日の仏事が次々に行なわれる、そのたびに
帝からはお弔いの品々が下された。

愛人の死んだのちの日がたっていくにしたがってどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであって、女御、更衣を宿直(とのい)に召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であって、拝見する人までがしめっぽい心になる秋であった。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ぶりね」

などと言って、右大臣の娘の弘徽殿(こきでん)の女御(にょご)などは今さえも嫉妬を捨てなかった。帝は一の皇子を御覧になっても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになって、親しい女官や、御自身のお乳母(めのと)などをその家へおつかわしになって若宮の様子を報告させておいでになった。

野分(のわき)ふうに風が出て肌寒(はださむ)の覚えられる日の夕方に、平生よりもいっそう故人がお思われになって、靫負(ゆげい)の命婦(みょうぶ)という人を使いとしてお出しになった。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深い物思いをしておいでになった。以前にこうした月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わってすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠(よ)む歌なども平凡ではなかった。彼女の幻は帝のお目に立ち添って少しも消えない。しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのである。

命婦は故大納言家に着いて車が門から中へ引き入れられた刹那(せつな)からもう言いようのない寂しさが味わわれた。

トイパル｜無料本・書籍・ダウンロード・取り放題｜トイレに貼りたい！トイレで読む本

未亡人の家であるが、一人娘のために住居（すまい）の外見などにも
みすぼらしさがないようにと、りっぱな体裁を保って
暮らしていたのであるが、子を失った女主人（おんなあるじ）の無明（むみょう）の日が
続くようになってからは、しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く
高くなった。またこのごろの野分の風でいっそう邸内が荒れた気の
するのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさし込んだ
その南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにものが
言えないほどまたも悲しみに胸をいっぱいにしていた。
「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、
運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使いが荒あばら屋へ
おいでくださるとまたいっそう自分が恥ずかしくてなりません」
　と言って、実際堪えられないだろうと思われるほど泣く。
「こちらへ上がりますと、またいっそうお気の毒になりまして、魂も
消えるようでございますと、先日典侍（ないしのすけ）は陛下へ申し上げて
いらっしゃいましたが、私のようなあさはかな人間でもほんとうに
悲しさが身にしみます」
　と言ってから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。
「当分夢ではないであろうかというようにばかり思われましたが、
ようやく落ち着くとともに、どうしようもない悲しみを
感じるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、
せめて話し合う人があればいいのですがそれもありません。
目だたぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。

若宮を長く見ずにいて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中にいてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい」

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返っておいでになって、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子がお気の毒で、ただおおよそだけを承っただけでまいりました」

と言って、また帝のお言ことづてのほかの御消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなっておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」

未亡人はお文ふみを拝見するのであった。

時がたてば少しは寂しさも紛れるであろうかと、そんなことを頼みにして日を送っていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困ったことである。どうしているかとばかり思いやっている小児（こども）も、そろった両親に育てられる幸福を失ったものであるから、子を失ったあなたに、せめてその子の代わりとして面倒めんどうを見てやってくれることを頼む。

などこまごまと書いておありになった。

宮城野（みやぎの）の露吹き結ぶ風の音（おと）に小萩（こはぎ）が上を思ひこそやれ

という御歌もあったが、未亡人はわき出す涙が妨げて明らかには拝見することができなかった。

トイパル｜無料本・書籍・ダウンロード・取り放題｜トイレに貼りたい！トイレで読む本